足して366歳 八ヶ岳に登る

54期の5人、故郷の名山に挑戦

この夏、同期5人で八ヶ岳に登ってきました。4年前の甲武信岳と蓼科山、3年前の燕岳に続く、故郷の名山への挑戦でした。

「年寄りの冷や水」と言われないように天気予報も入念に調べ、当初予定を2日間延期しての登山計画実行でした。計画自体もゆっくり、のんびりの高齢者プランで、普通なら1泊2日コースを2泊3日にしました。

なおかつ、出発時に雨が降っていたら登山は即中止で山小屋滞在という計画です。家の者には帰りが1日、2日延びることもあると前置きして出掛けました。

初日は美濃戸口から5時間かけて行者小屋まで。お酒も中生ビール1杯で我慢して翌日に備えます。翌朝は天気上々、赤岳（2899メートル）を目指す。地蔵の頭経由で急登もあって汗みどろになりましたが、八ヶ岳の主峰を踏破しました。頂上から去り難いものがありましたが、阿弥陀岳へ登るため、次の中岳に向かいました。中岳から振り返る赤岳は峻険でした。阿弥陀岳直下、これから登ろうと再度決意を新たにした瞬間、ガスが出てきて頂上が全く見えなくなりました。雨の前兆と思われ、全員が勇気ある撤退を決めました。登頂を断念して宿泊予定の赤岳鉱泉へ急ぎました。けがの功名で、鉱泉には一番風呂に入れました。

赤岳山頂を極める

3日目、赤岩の頭経由で硫黄岳（2760メートル）に登りました。ガスと小雨交じりで景観はききませんでしたが、台座の頭近くの「お花畑」で、コマクサの群生に歓声を上げました。間もなく後期高齢者に突入する世代でも感動する血潮は弱まっていないようです。

帰りのJR乗車駅の茅野市で打ち上げをしました。街は夏祭りでにぎわっていました。料理がおいしくて、値段がリーズナブルの居酒屋さんに感激が倍増しました。

来年は甲斐駒ケ岳を計画していますが、果たして実現するだろうか。（八ヶ岳登頂者は荻原統夫、沓掛文哉、神津勝重、小菅健司、田村朗の5人）

沓掛文哉（54期）

中山道69次を歩く（6）

大湫宿から加納宿まで

第17回は6月4日、大湫から細久手宿を目指す。ナンジャモンジャの白い花が咲き、のどかな街道歩きである。弁慶が運んできたという巨石を過ぎ、琵琶峠への石畳の道を上る。峠の上に和宮歌碑がある。「住み馴れし都路出でてけふいくひ　急ぐもつらき東路の旅」

細久手宿は寛政年間の大火と、明治になって鉄道から外れたため、往時の面影はない。尾張藩定本陣・大黒屋が今も旅館として営業している。ここで宿泊して、翌朝、御嵩宿に向かった。

御嵩宿までの12キロは、秋葉坂、謡坂など坂道の連続、和泉式部供養塔を見て御嵩宿に着いた時はヘトヘトだった。

太田宿脇本陣（国重文）

御嵩宿は連子格子の家並が残り、本陣は再建されて当時の面影を伝えている

次の伏見宿は木曽川の河港に近く栄えた。ペルシャから輸入されたラクダが3泊して評判になった旅籠屋は「お休み処・駱駝」の看板がかかる喫茶店になっていた。

第18回は10月22日。太田の渡し跡から太田橋を渡り、太田宿へ。国道が宿場の外を通ったため昔の姿を保っている。脇本陣は美しい卯建があり、国の重要文化財に指定されている。

日本ラインと命名された木曽川沿いの道を歩き、うとう峠へ向かう。峠を下りると、目の前に犬山城が見え、鵜沼宿に着く。

鵜沼宿は濃尾地震の被害が大きく古い建物は数軒のみだが、現在、本陣、脇本陣など町並みを再建中であった。

各務原の中山道沿いのビジネスホテルに泊り、翌日、間の宿・新加納へ。

新加納は旗本坪内家が陣屋を構えていた。旧御殿医・今尾家は広大な屋敷を構え、今も医院として営業している。

手力雄神社の一の鳥居の前を通り、細畑一里塚を過ぎると加納宿入口。関が原の戦いの後、家康が岐阜城の石垣を運んで造らせたという加納城は崩れかけた本丸の石垣が一部残るのみ。遥かかなたの金華山の上に再建された岐阜城が見える。そして岐阜駅前には、織田信長の金ぴか像がそびえ立つ。美濃では信長が一番人気なのだ。

清水計枝（64期）